

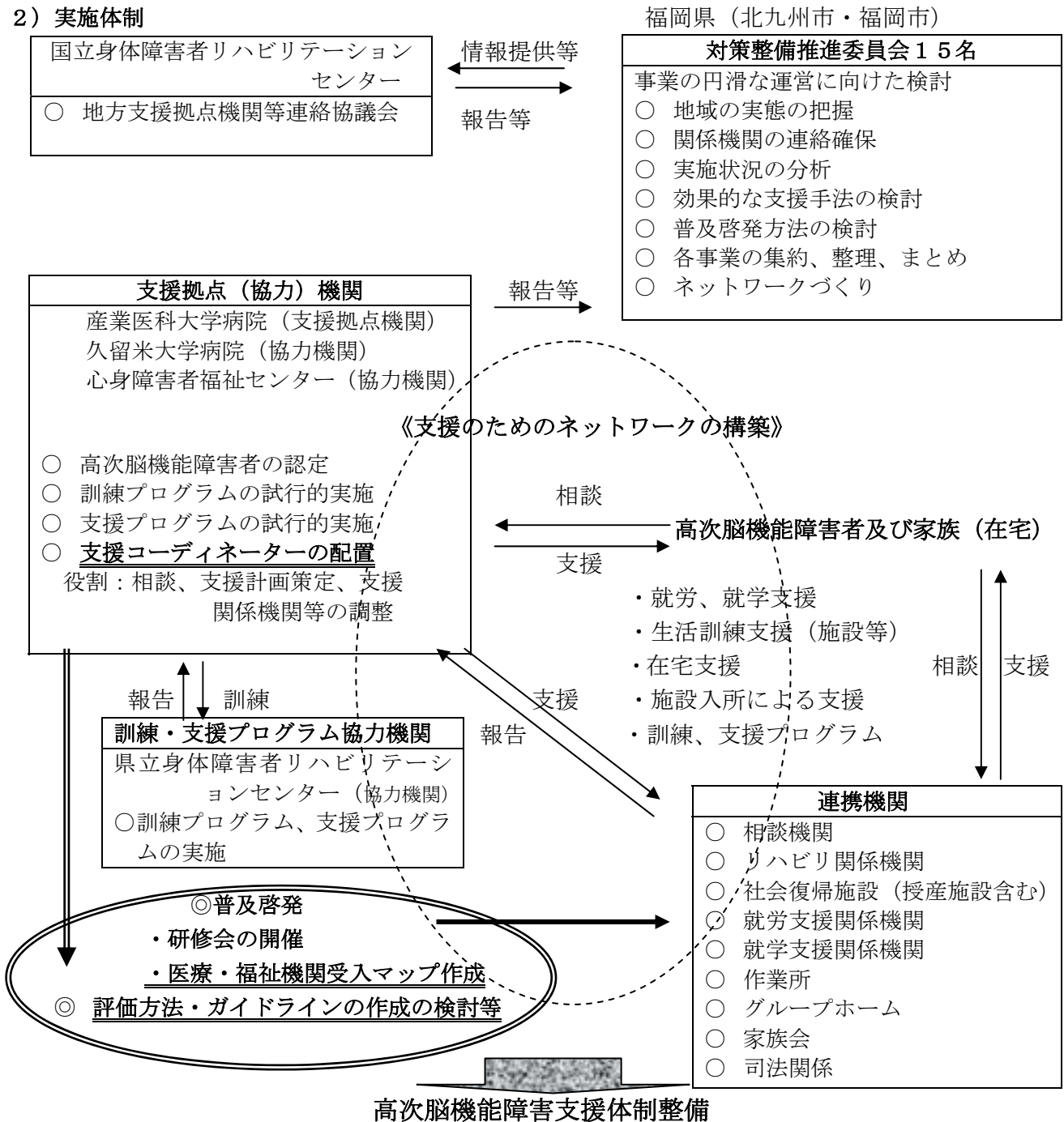
平成16年度高次脳機能障害支援モデル事業 年次報告
(福岡県・北九州市・福岡市)

1. 福岡県高次脳機能障害支援モデル事業実施体制

1) 事業の目的

本県におけるモデル事業は、外傷性脳損傷等により、記憶障害、注意障害、遂行障害等の後遺症を呈するいわゆる高次脳機能障害について、県が指定する地方拠点機関等と連携して、平成13年度から平成15年度までのモデル事業において策定された「診断基準」「訓練プログラム」及び「支援プログラム」を活用し、高次脳機能障害者に対する機能回復訓練、社会復帰支援や生活・介護支援及び各種制度を活用したサービスの試行的提供を行い、国立身体障害者リハビリテーションセンターとともに支援体制の確立を図ることを目的とする。

2) 実施体制



2. 本県における支援拠点機関及び協力機関の取組

1) 北九州市（産業医科大学）活動報告

*国への登録事業：平成17年3月1日現在2名（支援プログラム新規登録者）

*支援コーディネーターの活動報告：平成16年8月～平成17年3月の活動状況

1. 高次脳機能障害支援モデル事業登録者に対する支援
 - ・ 定期面接による問題整理、関係機関とのケア会議の開催、社会資源（障害者手帳等）の調整
 - ・ 国立身体障害者リハビリテーションセンターへの調査票報告
2. 産業医科大学病院における支援コーディネーター活動
 - ・ 家族からの高次脳機能障害外来受診相談、受診調整
 - ・ 県内、市内の医療機関からの受診相談、受診調整
 - ・ 県内、市内の保健福祉行政機関からの受診相談、受診調整
 - ・ 当院受診中の高次脳機能障害患者の社会資源調整（福祉サービス、施設利用支援）
3. 診 療

産業医科大学病院リハビリテーション科へ平成16年4月1日～平成17年2月28日に高次脳機能障害の評価・治療を目的に16名が入院した
（外傷性脳損傷10名、脳血管障害3名、その他3名）
4. その他

福岡県高次脳機能障害支援モデル事業における関係機関との連絡調整

*研修会の開催：「第2回医療福祉関係者および患者・家族のための研修会」

日時：2005年2月11日（建国記念日）10:20-12:30

場所：産業医科大学ラマツィーニホール

主催：福岡県高次脳機能障害支援モデル事業参加施設

（久留米大学脳神経外科学講座，産業医科大学

リハビリテーション医学講座，福岡市立心身障害福祉センター）

福岡県，北九州市，福岡市

共催：北九州リハビリテーション医学セミナー

協力団体：NPO 法人脳外傷「ぷらむ」

研修会参加者：合計403名

	医療機関	行政関係	福祉施設	患者・家族	その他
医師	8	0	0	-	0
看護師	10	1	6	-	2
理学療法士	12	2	3	-	0
作業療法士	50	1	5	-	2
臨床心理士	7	1	1	-	0
言語聴覚士	18	1	0	-	2
弁護士	0	0	0	-	0
医療ソーシャルワーカー	23	0	6	-	0
コーディネーター	12	1	2	-	0
その他	6	23	70	99	29
合計	146	30	93	99	35

国，福岡県のモデル事業の成果紹介がなされ，高次脳機能障害と支援コーディネーターのありかた等に関して有意義な討論が行われた。

*医療機関・福祉施設への「高次脳機能障害者受け入れ機関一覧」

患者・家族にとっても、医療機関にとっても高次脳機能障害者を受入可能な医療機関・福祉施設の情報不足している。そこで県内を中心に九州・山口地区の医療機関・福祉施設を対象に高次脳機能障害患者の受入状況についてアンケート調査し、結果を「高次脳機能障害者受け入れ機関一覧」として冊子にとりまとめた。

*日本損害保険協会助成事業「第2回産業医科大学リハビリテーション講習会」の開催協力

日時：2005年2月11日（建国記念日）13:00-15:00

場所：産業医科大学ラマツィーニホール

主催：産業医科大学リハビリテーション講習会実行委員会

協力団体：NPO 法人脳外傷「ぷらむ」

昨年度の講習会后に多く寄せられた質問に対して作成したQ&A冊子の解説、および地域福祉権利擁護事業と成年後見人制度、高次脳機能障害者の精神心理的特徴とその接し方、高次脳機能障害者の職場復帰に等について、それぞれの現場から具体的に有益な講演が行われた

*研究成果の報告

・第41回日本リハビリテーション医学会学術集会（平成16年6月3～5日、東京）において産業医科大学リハビリテーション医学講座より

<一般演題>

外傷性脳損傷者の社会生活に関する調査（第4報）：CIQの妥当性について

高次脳機能障害患者の退院後転帰に及ぼす要因の検討

高次脳機能障害者の手続き記憶

認知障害を伴う患者の事象関連電位の単一施行解析を用いた高次脳機能の研究

<シンポジウム>

外傷性脳損傷のリハビリテーション：高次脳機能障害者の職業復帰の5題を報告

・日本職業災害医学会会誌（52：335-340、2004）へ

「外傷性脳損傷者の社会生活に関する調査」を発表

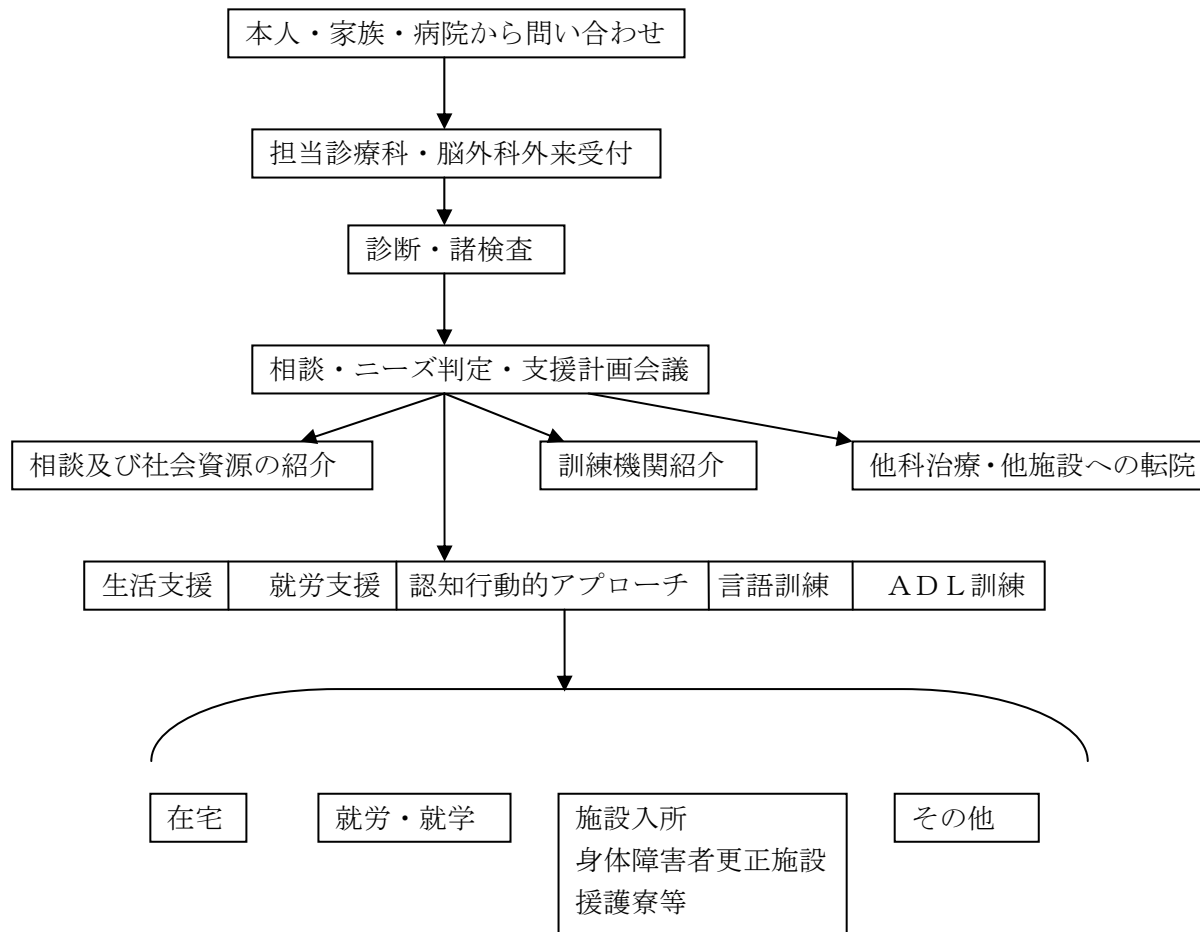
*これまで院内多職種が参加し継続しているTBIカンファレンス（月1回）に福岡県障害者リハビリテーションセンターからも参加

*3月18日神奈川リハビリテーション病院を医師、作業療法士、言語聴覚士、医療ソーシャルワーカーが視察及び意見交換

2) 久留米大学病院モデル事業年間報告

平成 16 年 10 月末に久留米大学病院に高次脳機能障害モデル事業支援コーディネーターが配置され、活動が開始された。

I、当院でのモデル事業の流れ



II、相談状況 (期間；平成 16 年 10 月～平成 17 年 2 月末日)

来所相談 15 件 (実人数 11 名)

男女内訳；男性 8 名、女性 3 名

相談内容；診断 6 件、訓練 5 件、就業 2 件、その他 2 件 (転院相談・損害保険相談)

III、今後の計画

1. 地域ネットワーク確立
2. 高次脳機能障害の啓発活動

具体的には、今後保健福祉環境事務所等の会議等にて、高次脳機能障害の説明等を行う事で、ネットワークづくり及び啓発活動を行う予定。

現在は、転院した先の病院のスタッフや施設等と連携をとり高次脳機能障害の情報交換等啓発活動を行っている。

IV、今後の課題

相談者 11 人中 3 名が県外であり、診断目的の入院という状況であった。退院後、居住地における継続的なリハビリにつなげていくことが必要と思われた。しかし、支援コーディネーターとして遠方の入院患者の居住地の情報収集が難しく感じられた。今後は、そうした方の居住地における地域ネットワークをどう広げていくかが課題と思われる。

3) 福岡市立心身障害福祉センター年次報告

平成17年2月末現在

(1) 支援ネットワーク業務 (内訳資料別添)

連携機関	情報交換 (実人数)	学習会参加
行政および相談機関	77件 (36名)	11 (90名)
入所施設	3件 (2名)	0
通所施設	22件 (4名)	2 (24名)
その他	73件 (32名)	3 (111名)
モデル事業協力施設	15件 (12名)	2 (7名)
計	190件 (86名)	18 (232名) (実 3回)

(2) 相談業務

総数 79件 (電話 67件、来所 13件、重複あり)

相談経路 (当事者・家族 70件、障害者生活支援センター 1件、病院1件、
モデル事業協力施設6件)

(3) 診療業務

初診者 25名、訓練開始 13名

訓練実人数 34名 (男性 27名、女性 7名) (平成17年2月末現在)

(4) 啓発事業

平成16年 4月24日 福岡市およびその周辺の医療福祉関係者のための研修会

平成16年 7月14日 第17回全国大都市身体障害者更生相談所主管者会議での
福岡市におけるモデル事業報告

平成16年10月7、28日 福岡市福祉行政担当職員対象の高次脳機能障害学習会

平成17年 2月11日 医療・保健・福祉関係者および患者・家族のための高次脳機能障
害支援モデル事業研修会

(平成17年3月 9日 福祉施設対象の高次脳機能障害学習会)

4) 福岡県身体障害者リハビリテーションセンター事業報告

(1)経緯

福岡県身体障害者リハビリテーションセンターは、地方支援拠点機関等(産業医科大学病院、久留米大学病院、福岡市立心身障害福祉センター)からの訓練依頼を受けて訓練・支援プログラムを実施する機関(訓練・支援プログラム実施機関)として、高次脳機能障害支援モデル事業に16年度から参加した。

(2)受入準備及び職員研修

- 1)高次脳機能障害支援モデル事業委員会の設置
- 2)地方支援拠点機関との連携強化
- 3)高次脳機能障害支援モデル事業先進施設の視察及び意見交換(2カ所)
- 4)高次脳機能障害支援モデル事業関係研修会の参加(5回)

(3)対応職員

・支援員(2名)・心理士(2名)・理学療法士(2名)・作業療法士(1名)・(言語聴覚士(1名))

(4)プログラム内容

- ①目的：注意障害、記憶障害、遂行機能障害、病識欠落、コミュニケーション障害、心理的問題、身体機能障害に対してアプローチを行うことにより、自立・社会復帰を支援する。
- ②評価：上下肢機能、屋内外の移動能力、ADL、FIM、買物能力、言語検査、WAIS-R、リバーミード検査、WCST、仮名拾いテスト、TMT、POMSなど。
- ③訓練・支援
 - ア.個別訓練／グループワーク〔心理士〕
障害病識、対人関係技能改善、認知トレーニング
 - イ.身体機能訓練〔理学療法士・作業療法士〕
 - ウ.言語機能訓練〔言語聴覚士〕
 - エ.生活訓練・社会適応訓練〔支援員・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士〕
ADL、入所利用者との対人関係の状況

(5)対象者

- ①入所：3名(交通事故による外傷性脳損傷1名、脳血管障害2名)
- ②通所：3名(交通事故による外傷性脳損傷3名)

(6)結果

一人ひとり違った症状、障害であるが、生活への影響は身体障害よりも高次脳機能障害が大きく、特に社会適応のための能力の獲得が必要不可欠である。

入所の1名は元の仕事への復職を目指し、1名は障害者能力開発校への入校を模索し、1名は身体障害者授産施設での生活適応に向けて訓練を行っている。

一方、通所の1名は職場への適応による就労の継続を、1名は学生のため卒業後の進路を共に考える場として、1名は自分で考える能力を身につけての身体障害者授産施設の利用を目標にして、アプローチを継続中である。